

私にしかできないこと

高隈中学校 二年 過 あおい

現在中学二年生になった私は、小学生の頃
に比べて、知識も増え、現代の日本・世界に
おける状況、自分の立場などを考えることが
できるようになりました。また、あまり考え
たこともなかった「福祉」についても、最近
では、良く考えていると思います。

今まで私は「福祉」といえば、多くの人と
同じようにテレビやニュースを、主な情報源
としてきました。しかし、今は日常の身近な
所から「福祉」を考えるようになったのです。

私たちのように、都市部から遠く離れた場
所で暮らしていると、よくお年寄りの方に会
います。私の家庭は、祖父母の家に曾祖母が
一緒に住んでいます。私は、よく学校終わり
に祖父母の家に行ったり、休日にもよく行っ
たりしています。私の曾祖母は、朝、早く起
きて畑へ散歩したり、地域への活動をしたり
しています。私は、会った時には必ずあいさ

つをするようにしています。あいさつをする
 と、くしゃっ^ャと笑って返してくれます。私は、
 このような日常に幸せを感じます。たっ^ッたひ
 とことだけです。それが、それだけで、笑顔になっ
 てもらえるのが、とても嬉しいのです。
 何故、私がこのように曾祖母に積極的に関
 わるのかというのには、理由があります。今
 から八年前の冬、小学校一年生の頃、私は曾
 祖父を亡くしました。当時、人の死を身近に
 感じたことがあまりなかった私にとって、曾
 祖父という大きな存在を亡くしたことは、心
 にとっても大きな傷をおいしました。曾祖父は、
 私の笑顔が好きだと言ってくれました。元気
 な声を聞くだけで、笑顔に、幸せになれるの
 だと教えてくれました。
 そして、私は曾祖父の死をきっかけに、も
 と曾祖母やお年寄りを大切に笑顔にしたいと
 強く思うようになりました。曾祖父が教えて
 くれた幸せを、もっと多くのお年寄りにして
 あげたい。それが今は亡き曾祖父へのプレゼ

ントになるものだと思ひます。私は、どんな
 に辛く、孤独なお年寄りにも孫のように接し
 光を注ぎたいと心から思ひています。
 私はまだ、十四歳。二十歳にもなっていないな
 いから、今すぐ「福祉の社会」を築き上げる
 ことは、到底不可能ですが、まずは身近なお
 年寄りを笑顔にしていくことで、私の住んで
 いる鹿屋市を「福祉のまち」として作ってい
 く活動をするのが当たり前前の地域になっ
 てほしいと思ひています。そして、いずれは自分
 たちの世代で、福祉の万全をつくり、お年寄
 りや子供にも不便がなく、誰もが笑って暮ら
 していただけるような街づくりをしたいです。ま
 す、あなたのため、たひとことの挨拶だけで誰
 かが笑顔になつたり、元気になつたりすると
 いうことを知つてほしいです。そして、ここ
 鹿屋市から始まり、鹿児島、九州と広げ、本
 当にお年寄りに優しく、過ごしやすい「福祉
 の社会」を「福祉の国」の日本という旗を掲
 げることにできるような国づくりを夢見てい

No.

No.

ます。